

現代語・現代文化学系研究会発表要旨

月例会(2004年1月28日)

クリストファー・マーロー：イギリス宗教改革期の大学と学生

藤田玲子

クリストファー・マーローはシェイクスピアの先駆的劇作家群、大学での才子(University Wits)の代表的作家というのが、文学史の位置づけである。また、29歳で殺害された状況について、彼が大学時代から関わっていたスパイ活動に絡んでの「口封じ」とみられているため、その伝記にも好奇の目が向けられ、作品の評価にも少なからずその影響を及ぼしてきた。しかし、彼の作品には、その時代を表す際のキーワードとして述べられるほぼ全ての要素が題材として取り上げられているため、彼の伝記上の問題は16世紀の歴史的転換期の問題として考える必要がある。

マーローはイギリス国教会の総本山のあるカンタベリー出身であり、カンタベリー大司教マシュー・パーカーの奨学生として、彼が前学長であった、ケンブリッジ大学、Corpus Christi Collegeに入学している。これは本来、聖職者の道を選択することが当然と考えられるが、なぜ彼は聖職者にならなかったのか。また、大学生の身分で、なぜ諜報活動に関わることになったのか。中世の大学の歴史から考えると、16世紀に大学を取り巻く状況が大きく変化したことは明らかである。そこで、彼の伝記上重要な、大学と宗教改革の問題を取り上げる。

## I 中世の大学：国家、教会、大学の繋がり

ヨーロッパ、とりわけ、イギリスの大学の歴史を見る場合、国家、教会、大学の深いつながりを考えざるを得ない。イギリス(イングランド)では、ヨーロッパ各国と異なり、19世紀まで、オックスフォード市とケンブリッジ市以外に大学設立の認可(Royal Charter 独占権を認める特許状)が下りなかったことから、イギリス固有の事情があったと見られる。国家においては君主、教会においては、宗教改革以前は法王を頂くローマ・カトリック教会、以後はイギリス国教会、大学はこの二つの影響を受け続けていく。宗教改革期の大学の変

化と、マーローを始め学生たちが対カトリック諜報活動に従事することになった原因は、このことを抜きにしては考えられない。

そもそも、中世、なぜ大学が成立することになったのか。6世紀のベネディクト会設立以来、中世、各地に設立された多くの修道会所属の修道院は、写本作業で本(聖書のみならず、ギリシャ・ローマ古典作品)を生産し、図書館を成立させ、学術・教育(また、芸術)の中心としての役割を長く果たしてきていた。修道院の外になぜ新しい教育組織が必要になったのだろうか。しかも、大学は、ケンブリッジの場合もそうであるように、修道院から多くの学僧を受け入れている。

大学がヨーロッパ各地に成立した同時期の12 - 13世紀、ローマ・カトリック教会の組織は拡大し強固になっていく。大学の成立の経緯自体は、時期もそのメンバーも明確ではない。しかし、国王もしくは法王庁から設立の特許権を得て以降、教会の組織の拡大に伴い、修道院に属する修道僧(regulars)ではない、一般信徒を監督する教区に配属される教会聖職者(seculars)が必要となった教会に対し、大学は、修道僧を受け入れて教育し、教会聖職者として供給する役割を進んで引き受けていたように見える。イギリスの二つの大学は、神学ではヨーロッパ随一だったパリ大学との関係が深かったため、同様に神学が教育の中心であり、教会への役割を十分に果たしていた。イタリアの場合、世界最古の大学とされるボローニャ大学は、教会法(canon law)とローマ法(Roman law, civil law)、両法の教育で有名であり、中世、ローマ法王を多く卒業生に持つが、ローマ法に基づく国家運営術を体系的に学ぶ教育組織が必要であったと推測できる。

また、法王庁のみならず、君主も教会聖職者供給の大学の役割を評価する一方、国家の人材供給や、著名な学者を集めることによる君主としての名声をも望んでいたように見える。中世の宗教的世界を理解することは容易ではないが、大学は教会と国家(君主)と深いかかわりを持ちつつ、商業都市の発達による、修道院外のより世俗的な教育機関の必要を満たす役割も担うこととなる。

## II 宗教改革：大学の変化

キリスト教史の宗教改革や教会改革は16世紀以前にも少なからずあるが、14世紀のジョン・ウィクリフの改革運動は、16世紀に続く波乱の発端であろう。彼は、この世は王により治められるべきであるとして王権神授説を支持し、信仰は聖書に基づき、神と一人間が直接対峙するものであるから、ローマ・カト

リック教会の構造や組織は聖書上根拠が無い、として斥けた。ローマ・カトリック教会は「ローマ」付きのキリスト教、つまり、ローマ文化を継承する役割を担った教会であることは、修道士たちが、聖書だけでなくギリシャ・ローマ古典のテキストの写本作業を熱心に行っていたことから、明らかである。彼らの一部が大学に学僧として入ってきたとき、古典的教養科目(七科 *trivium* と *quadrivium*) と哲学を基礎に神学を学ぶことが、良き聖職者となる上で重要と見なされていた。宗教改革において、聖職者像を巡ってカトリック派とプロテスタント派が対立するようになるのは、このような背景がある。カトリック派は人文学の教養を身に付けた聖職者 (*humanist clergyman*)、プロテスタント派はイエス・キリストを手本とした福音を説く伝道者 (*preaching Christ*) という避けがたい対立が起こる。

16 世紀に、それ以前の宗教改革と異なり、爆発的な運動に発展したのはなぜだろうか。最大の要因は 1455 年のグーテンベルグによる印刷技術の発明によって、翻訳された聖書が印刷本となってそれまでとは比較にならないほど、安価に流通し始めたことである。豪華な装丁が施された写本版は高価であり、主に教会、修道院、大学図書館、貴族の所蔵品で、美術品のように壁一面に並べ置き、半ばインテリアとしてステイタス・シンボルでもあった。宗教改革者、ウィクリフ、テインダル、ルターは、法王庁唯一公認のラテン語のウルガダ版に対して、聖書の自国語への翻訳者となったことは、彼らの主張する聖書にのみ基づく信仰の延長線上にある。ラテン語版では教育を受けていない一般信徒は読むことは出来ないし、高価な写本版の本では身近に見る機会すらない。彼らは、法王庁で統一された教義に基づいて教育された聖職者を介してのみ、信仰を持つことになる。ラテン語の優位は各国語の発達を遅らせながら、教会の権威を支え基盤を安定させることに寄与した。従って、法王庁が聖書の翻訳版の印刷出版を脅威と捉え、何とか封じ込めようとしたのも当然である。オックスフォード市には 15 世紀後半、ケンブリッジ市には 16 世紀初頭、印刷所が設立される。

14, 15 世紀にかけて、イギリスの二つの大学は次第に教会よりも、国家との関係が緊密になる。これは、一つには国王がカレッジ創設の許可や財政面の資金援助、それに伴って大学の管理運営により関与することになったためである。また、15 後半から 16 世紀前半、ヒューマニト達による教育普及活動の成果で、それまでの学僧やジェントルマンリー層の学生に加えて、大学に貴族の子弟が流入し、結果的に、宮廷の政治がそれ以前より直接大学に持ち込まれる

結果となった。大学側が、勉強しないで取得できる名誉学位の類を設けたり、授業出席日数を他の学生より少なく設定したりと、彼らへの便宜を図ったことによって、大学の学位に依存して職を求める必要の無い貴族学生が優雅に闊歩する雰囲気が作られていったことである。また、15世紀、印刷技術の助けで、大陸から流入するルネッサンス期の著作や改革者の書物の量、エラスムスを始めとする著名な学者の大学への来訪が増加する。1517年、ルターの改革が始動した時点で、すでに神学を目指す学生が多数派ではなくなり、大学は、中世に比べて教会の拘束からかなり自由になっていたと考えられる。

### III イギリスの宗教改革：ケンブリッジ大学の躍進

イギリスにおける宗教改革は大陸のそれとは根本的に異なり、奇妙な形を取る。発端は、ヘンリー8世がスペイン(アラゴン)出身の王妃との離婚を承認するよう求めたことに対し、法王庁がスペインとの緊密な関係もあり、拒否したことにつながる。1534年、国王至上令(Royal Supremacy)によってイギリス独自の宗派とも言うべき、イギリス国教会(the Church of England)が成立し、国家と教会の上に君主の支配権が確立され、ローマ・カトリック教会につながる修道院は解散された。中世以来の大学と修道院の関係はかなり薄れかけていたとはいえ、ここで決定的な亀裂に至る。

マーローが生きた16世紀後半は、カトリックのメアリー1世治世(1554-58)でのプロテスト弾圧の後、1558年のエリザベス1世即位で再びイギリス国教会が復活する。この際取られた宗教的寛容政策は、大陸の宗教紛争からイギリスを守るための政治的妥協の産物であり、また国家の独立を維持する上ではそれ以外ほとんど選択の余地が無いものであった。従って、エリザベス朝は、国教会を通して君主に忠誠を表すことのみが求められたため、プロテスタント穏健派と急進派(カルビン派)、カトリック穏健派と急進派(反宗教改革派)、宗教性よりもカトリックの伝統様式に居心地良さを覚える保守派等、宗教上の立場を異にする多くのグループが混在することになる。これは大学の中でも同様であって、混乱した状況の下で世俗化が加速し、一定の自由な空間が作り出されていく。

イギリスがプロテスタント国になって以降、特にエリザベス朝に入って、ケンブリッジ大学はその規模、内容ともに大きく躍進する。1533年以降の4人のカンタベリー大司教全て、エリザベス1世の家庭教師、エドモンド・スペンサー、フィリップ・シドニー、フランシス・ベイコン、ゲイブリュエル・ハー

ベイなどの宮廷周辺の貴族、文人、学者、トマス及びフランシス・ウォルシingham、ウィリアム及びロバート・セシルの実質的な権力を持った官僚政治家等、後世、16世紀のイギリスを代表する著名人物の大半がケンブリッジ大学出身者で占められる。また、17世紀前半、イギリスを去って、ハーバート大学（所在地をケンブリッジと命名）へ財産の寄贈を行ってその名が付けられたジョン・ハーバートを始め、ニュー・イングランドの建設者となった多くのピューリタンたち、彼らも大半がケンブリッジ大学出身者である。完全に色分けすることはできないが、オックスフォード大学をカトリック派(保守的、伝統的)、ケンブリッジ大学をプロテスタント派(改革的、進歩的)とする見方は妥当である。こういった現象が起きた背景は定かではないが、16世紀初頭のトマス・モア、ジョン・コレット、ウィリアム・リリー等のヒューマンストがオックスフォード大学のカトリック派と見られていたことや、女王の家庭教師達がケンブリッジ大学出身者であったこと、大陸からの新学問(new learning)の受け入れに積極的であったこと等、複数の要因が重なったからではないか。ケンブリッジ大学の出身者が宮廷を動かすようになるに連れて、大学内部に主にカトリック監視に必要な諜報活動の要員を調達する、何らかの組織的動きがあったのではないかと推測できる。この時期は新時代の実力派官僚、フランシス・ウォルシingham、ロバート・セシル指揮の下、諜報活動が頂点に達した時期であり、それだけ要員の需要が高かったことから、関わった学生はマーロー以外にもかなりいたと考えられるからである。1587年のスコットランド女王メアリー救出計画とエリザベス1世暗殺計画(Babington Plot)を未然に防ぎ、翌年1588年のスペイン無敵艦隊(Armada)の撃破は、諜報活動による情報収集と分析の成果である。

マーローが在籍していた時期(1580-86)の少し前、イギリスが再度プロテスタント国に戻ったため、新たに新体制に合わせて教育された聖職者が必要となり、中世以来、大学が引き受けてきた聖職者の需要に合わせて入学者を増加させていたが、すでに学生数が需要を超える数に達し、卒業後の職の確保は容易では無くなっていた。しかし、マーローが聖職者になる意志が全く無かったように見えるのは、こういった事情のみならず、大学内部に宮廷との繋がりが多く、その周辺で仕事につく可能性を感じていたこと、なによりも、大学が中世の聖職者養成所的姿から大きくかけ離れ著しく世俗化が進んできていたこと、学内外での演劇の興隆による演劇活動による成功の可能性が考えられたこと等が原因ではないか。

イギリスの宗教改革は興味深い結果を残した。古代以来のキリスト教とローマ文化の一体化したものから、「ローマ」(文化とカトリック教会)を抜く厳格なカルピニズム(ピューリタニズム)と、「ローマ」からキリスト教を抜きさり、古代のギリシャ・ローマ文化の再生を志向する動きとが、連動して起こったことである。これは文芸の才能豊かなルネッサンス的君主の統治と前述した宗教的寛容政策の結果である。マーローの宗教的立場を作品から読み取することは難しいが、この時期のイギリスには、シェイクスピアは無論のこと、驚くほどの自由な発想や思考が生まれていたことは特筆に値する。彼が作品で取り上げた題材は、古典、モンゴル、オスマントルコ、マキャベリ、十字軍騎士団、ユダヤ人、宗教戦争、大学、ドイツの神学者、と多岐にわたるが、大学での教育、その環境、接触のあった人々、政治の背景で活動したこと等から得た体験が新しい演劇の世界を切り開く画期的な作品群は創作した。しかし、恐らくはその作品の源となった活動が原因で、若くして命を落とす結果となってしまったことは残念である。

以下は最新の優れた研究書で、巻末にほぼ完全な文献が収録されている。

クリストファー・マーローについて：

Nicholl, Charles *The Reckoning: the Murder of Christopher Marlowe*, Chicago U.P. 1992

ケンブリッジ大学について：

*A History of University of Cambridge* (4 Vols) 中、

Leader, Damian R. *VOL.I: The University to 1546* Cambridge U.P. 1988

\*Morgan, Victor *VOL.II: 1546-1750* は2004年3月刊行予定

イギリス宗教改革について：

Shagan, Ethan H. *Popular Politics and the English Reformation*, Cambridge U.P. 2003